

的思考にますます多くの自由を認めるようになっていく過程の段階的歴史とされるのである¹³⁾として感情の介入に疑念を表明している。しかしこうした「分類の未開形態」の問題点はその核心が宗教に依存するものではないし、また宗教の基本的な特性に依存するものでもないことで、宗教は分類の理解のための重要なかぎではなくなるのである。¹⁴⁾ さらにまた「宗教生活」においては一部の表象が感情的要素をもつことは公然と認められているが、はっきりしていることは感情的要素の存在が当該表象の科学的分析を妨げるはたらきをしているものではないことである。だからデュルケームの感情的要素は「分類の未開形態」と「宗教生活」とでは異った利用のされ方をしているのである。¹⁵⁾ 神聖なものは感情的要素を伴うが、そのため神聖なものの科学的分析が困難になることはないのである。感情的要素といえば未開社会における分類概念における存在はレヴィ・ブルュールによって発展された。レヴィ・ブルュールの著作「未開社会の思惟」 *Les fonctions mentales dans les sociétés inférieures* は1910年の刊行で、彼はその中で未開人の思惟 (mentalité) は感情的要素と強く結びついているため近代人のように合理的思考作用ができないこと指摘した。彼は未開人の思惟の特質はそれ故 mentalité prélogique (前論理的思惟) に支配されていると断言したのであった。レヴィ・ブルュールはこうして近代人と未開人の思惟の美が質的なものであるとのべていたのである。もっとも晩年になってレヴィ・ブルュールは近代人の論理的思惟と未開人の前論理的思惟の間に質的な差が存在すると見た考え方は誤りであって、両者の差は量的なものであると訂正したのであるが、その点においてデュルケームはレヴィ・ブルュールのように完全に進歩を否定する立場はとっていないかった。両者は相互に尊敬し合っていて批判的態度を示してはいないが、基

本的には相互にこのように大きな相違を示していなかったのである。ところでデュルケームは「宗教生活」において、宗教の分析を通じて、認識論的問題を解決しようと試みている。この点で「宗教生活」は「未開分類」とは根本的には異なるのである。

「宗教生活」においてデュルケームは宗教が物的事物に関係するだけでなく、道徳的な事物に関係するという二元的特徴をもっているのであって、その点で「宗教は人類の文明の重要な萌芽が生れそだった子宮に類比されることができる」¹⁶⁾と見るのである。だからデュルケームによると、宗教は人間に物を考えること、抽象的に思考することを表象を通じて教えたのである。¹⁷⁾ その意味でも「分類」が明かにしようとしたこととは目的はまったく異っているのである。つまりすべての宗教は観念の体系であってこの観念の体系は事物の多面性を包括しようとし、同時にわれわれに世界の完全な表象を与えようとしているのである。¹⁸⁾ その意味において宗教は人間の精神を可触的な外見への隷属から解放し、それを支配し、感官によって分離されたものを結びつけるはたらきをすることができるのだとみる。¹⁹⁾ この点で宗教が果してきた特別の貢献は宗教に含まれる宇宙論的要素である。すなわち宗教は世界、人間の存在または社会集団を全体として見、それらの中に力 forces が作用していることを見ることを示したことなのである。デュルケームは「宗教生活」のはじめに「あらゆる宗教は神的存在に関する思弁と同じく宇宙論を含む」²⁰⁾と重要な宣言をしている。それ故にデュルケームは人びとが抽象的概念を創造するのを助ける役割は宗教の特性に由来するものであることを認めていたのである。だからデュルケームの見解によれば、宗教は人間が集団生活を営むことの結果として生ずるものであるが、そのことが宇宙論を創造させることになり、

13) *Ibid.*, p. 95

14) W. S. F. Pickerling, *op. cit.*, p. 58

15) *Op. cit.*, p. 59

16) E. Durkheim, *Les Formes élémentaires de vie religieuse*,

17) W. S. F. Pickerling, *op. cit.*, p. 60

18) E. Durkheim, *op. cit.*, p. 200

19) *Ibid.*, p. 340

20) E. Durkheim, *op. cit.*, p. 12